

軽度認知症と診断された高齢者が抱えるスピリチュアルペインについて

桜新町アーバンクリニック
/桜新町ナースケア・ステーション
川田美咲

01 | 研究目的

軽度認知症と診断された高齢者が日常生活のなかで抱えているスピリチュアルペインの内容を明らかにすることで、認知症とともに生きる高齢者の自己を支える看護のあり方を検討する

02 | 研究方法

- (1)デザイン：質的記述的研究
(2)研究協力者：軽度認知症と診断された65歳以上の者
(3)用語の定義：
①スピリチュアルペイン
認知症を誘因として生じる「時間存在・関係存在・自律存在」の3つの次元から構成される「自己の存在と意味の消失から生じる苦痛」¹
②スピリチュアリティ
個人の生きる根源的エネルギーとなるものであり、存在の意味に関わる²

- (4)データ収集：
期間は2024.9.18～10.16。地域包括支援センターおよび介護医療院の管理者から紹介を受けた。
(5)データ分析：
基礎情報は本人への聞き取りと診療録から収集した。スピリチュアルペインは、スピリチュアリティにかかわる聞き取りとSpiritual Pain Assessment Sheet³の枠組みに基づくインタビュー(表1)により収集した。得られたデータからコードを作成し、スピリチュアルペインについては3次元(時間性、関係性、自律性)に基づき整理し、事例ごとにまとめた。

03 | 倫理的配慮

兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認（番号2024M04）を得た後、研究協力施設の承認を得て実施。インタビューは心理的負担に配慮した援助的コミュニケーション技法に則り1回30分程度、2回に分けて実施。研究内容の説明、同意確認、不安なことがないか訪問ごとに確認した。

04 | 結果

研究協力者は、在宅で生活する男性1名（以下A氏とする）および介護医療院で生活する女性2名であった（表2）。3事例の分析から共通するスピリチュアルペインの内容が抽出された（図1）。以下に内容を示すとともに、例としてA氏の結果を示す（表3、図2）。

表1.インタビューガイド

- 1回目（スピリチュアリティに関わる内容）
○暮らしの中で大切にしていることはありますか
○ご自身にとって元気の源になっていることは何ですか
○いま、気になることや心配事がありますか
2回目（スピリチュアルペインに関わる内容）
*1回目の語りを文脈に織り交ぜて
○大切な人は誰か、その方に対して気がかりに思うことはありますか
○物忘れの症状が出始めたとき、いままでの自分と何か変わってきたと感じることはありますか
○生活を送るなかで、自信がなくなってきたことはありますか

表2.研究協力者概要

項目	A氏	B氏	C氏
属性	82歳 男性 / 自宅	85歳 女性 / 介護医療院	87歳 女性 / 介護医療院
*認知機能	CDR: 1 (R.6.8)	HDS-R: 14 (R.6.8)	HDS-R: 24 (R.6.8)
自覚症状	体調は良いが、気分的にはしんどい時もある	痛みがなく、身体が動くことに満足	血圧も高くなく。調子が良い
調査実績	2回 (計103.8分) / 300コード	2回 (計73.4分) / 194コード	2回 (計84.7分) / 320コード

* MMSE18点以上、CDR0.5～1、HDS-R19.10±5.04の範囲に該当する

表3.A氏の概要・人となり

認知機能	約束事や読んだ内容を忘れるなどの短期記憶障害がみられる。質問の回答時に妻へ確認することはあるが、言語コミュニケーションは良好。
家族・生活背景	妻と二人暮らし。娘と息子家族、孫が近隣に在住。 50年間サラリーマンとして勤め上げた。毎朝の海岸沿いの散歩を欠かさず、月1回の麻雀やグラウンドゴルフにも妻や村の仲間と参加するなど、地域とのつながりを大切にしている。
場所	自宅の客間（妻同席）

図1.3事例の共通性からみえたスピリチュアルペイン

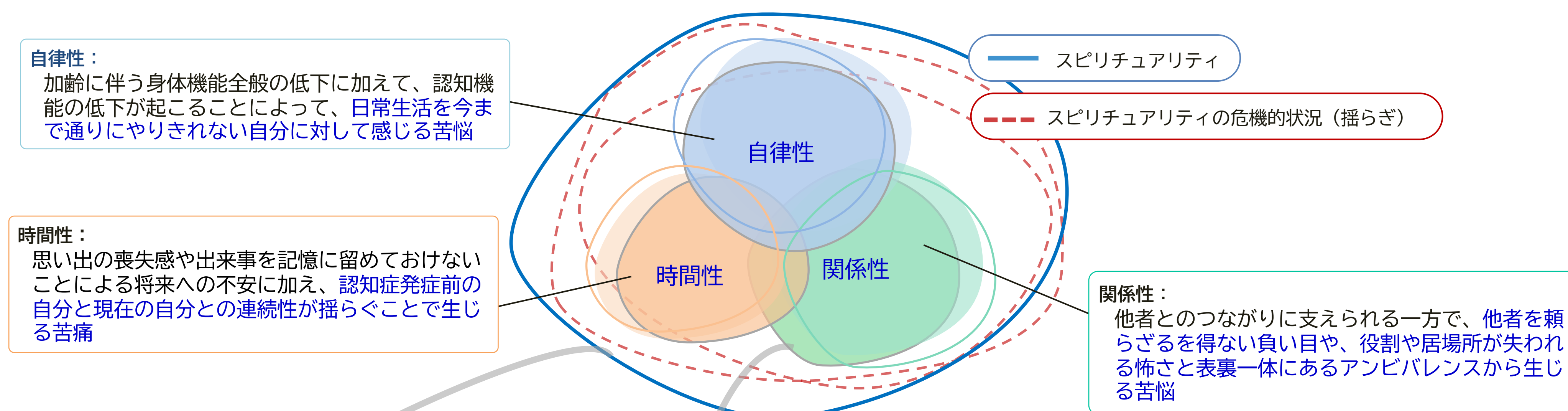


図2.A氏のスピリチュアリティとスピリチュアルペイン

スピリチュアリティ	スピリチュアルペイン
カテゴリ① 【できることを通して自分の可能性を感じている】 ■健康への信念を持って歩くことを日常にしている 「足腰が弱るとだめだから、ウォーキングなんかは毎日するようにしているんです。〈A189〉」 ■趣味の腕が未だ衰えていないことを得意に思う 「まあ、麻雀をやっても大体勝つしね。」〈A086〉「麻雀をしていても、（勝つためには）どういう方向性をとるか、どういう役作りをするのかというのを、決めていかないといけないから。〈A133〉」 ■症状に囚われず自分のペースで楽しむ術を持っている 「本を読んでいっても、最初の方はどうだったかなと、また最初から読みなおさないといけない。ははは。（何度でも読めるので本を買わなくていいと微笑む妻と目を合わせて笑う）〈A309〉」 ■年長者への経緯と張り合いの気持ちを持っている 「（自治会には）私より年いってる人もいる。〈A229〉」 「（6つ上の）Mちゃんでも、一人で暮らして、料理も自分でやってね。〈A259〉」	カテゴリ① 【できることの範囲が狭まっていることを感じる】 ■成果を出すために励むことができなくなっている 「ゴルフはもう全然、練習にも行かなくなったので、もうだめだろうね。〈A223〉」 ■体力・気力の低下が活動範囲を狭めている 「そういう面（意欲）では、やっぱり、体力的にも落ちているし、そういう元気さというのは、なくなっているかもしれない。〈A061〉」 自律 カテゴリ② 【自分の中にある認知症を否応なく意識させられる】 ■症状が進んでいないことに救いを求めている 「その（海馬の）萎縮度は、あまり減っていなかったし、自分自身では、確かに認知症は認知症だけれども、自分ではそんなに進んでいないのかなという、感覚なんだけどね。〈A081-2〉」 ■物忘れが社会生活に及ぼす影響を常に心配する 「なにか、物忘れしないかなとかね、何かの約束、そういうのがあって。（物忘れ）してないのかなとか、そんなことをしょっちゅう気にするとか。（忘れないように）できるだけ物は、全部書くようにしているけれども。〈A173〉」 自律 時間 関係 カテゴリ③ 【認知症の進行を生活の中で実感する】 ■生活の中で直面する物忘れに苦勞する 「突然こうなったら（認知症になったら）ね、あれ、またどこかに行ったら、わからないようになってしまったな。あのときは往生した。〈A111-2〉」 ■治療で回復が叶わない事実を飲み込まざるを得ない 「（薬が）効くといっても、良くなりはいないだろう。進行をあれする（遅くする）だけなんじゃないの。〈A284〉」 自律 時間

凡例：【】 カテゴリ ■ サブカテゴリ 「」 コード例

05 | 考察

- (1)A氏は「できること」を通して自己の存在を確かめていると考えられ、「できること」が狭まっていくことは、存在の意味を失う危機的状況であると考えられた。軽度認知症高齢者にとって、生活のつまずきは、その人を支える自己存在そのものを揺るがしうることが示唆された。
- (2)本研究では、3事例すべてに共通して、スピリチュアリティの揺らぎが主に「自律性」に関するスピリチュアルペインとして表れており、その不確かさとともに「時間性」や「関係性」に関するペインも複合的に生じていた。

06 | 結論

- (1)軽度認知症高齢者のスピリチュアルペインは、老年期を生きるなかで経験するスピリチュアリティの揺らぎと関連して生じていた。老いを生きるということ自体が、その揺らぎを経験するプロセスになり得ると考えられた。
- (2)認知症高齢者への看護は特別なものではなく、高齢者の自己を支えることを通して、老年期の生活全般を支える看護の基盤として捉えることができた。

07 | 看護への示唆

- (1)支援がつながりにくいとされる認知症初期段階においても、支援対象として関わることの重要性が示された。
- (2)その人らしさを支えるためには、一人ひとりが大切にしているものや存在の意味に目を向け、スピリチュアリティの揺らぎや苦悩を早期から捉えていく必要性が示された。